2008．3．1
№149

編集　樋口　みな子

E-mail
minginga@agate.plala.or.jp
郵便振替
「銀河通信」
02740－7－56535
（6号分1,000円）

待ち遠しい光の春

2月19日　利根別自然休養林のエゾフクロウ

気ぜわしい日々を送るうちに早２ヶ月が過ぎました。皆さまはお元気でしたか？

今年の野幌は１月中旬過ぎから豪雪が続いています。毎朝の雪かきが日課になりました。昨年の雪崩事故以来、冬山に行く機会は少なくなりましたが、最近は、天気の良い日にひとりで野幌森林公園を歩いたり、馬追丘陵や岩見沢の利根別自然休養林を仲間とスノーシューで歩いたりしています。先日は利根別の森でエゾフクロウに出遭いました。大きなパッチリした目で私たちを見守ってくれているようでで楽しい一日でした。

自分の力を考えた時、もう冬山をやらないほうがいいのではないかと悩み、途方に暮れて立ちつくした時、私を支えてくれたのは、身近な自然や友人、そして好きな本でした。

新年の頃でしょうか？庭を見るとオレンジと黒のツートンカラーが美しい３～４羽のアトリがナナカマドの実をついばんでいるのです。その姿が愛らしくいつまでも眺めるのが朝の楽しみになりました。ナナカマドを食べ尽くした頃アトリの姿は消えていました。代わって登場したのが孤高のハシブトガラです。群れて行動せず、いつも一羽なのが自分の姿と重なって「また帰っておいでよ」と心の中で声をかけています。

銀河通信が今年２０周年を迎えます。創刊の頃は日常生活の中で考え感じたことを綴っていました。この数年は山の話題が多くなりましたが、インターネットでたくさんの情報が入る今、銀河通信で伝える意味はあまりないように思います。一方で本や映画の紹介を楽しみにしているよという読者が少なからずいます。私の魂がこもった身の丈にあった通信を細々と続けられたらいいのかなと考えたりしています。物足りない通信になるかもしれません。

時間に追われるのではなく、日常を丁寧に生きたいなと思います。

遅くなりましたが今年初めての通信です。今年もご愛読よろしくお願い致します。

萩の山から見る夕張岳

雪に覆われた我が家

雪崩に遭わないために（その２）

写真提供　北海道雪崩研究会

雪崩講習会受けました

１月２０日の中山峠でのプレ講習会、２月２３日～２４日、吹雪のキロロスキー場近くでの雪崩講習会を受講。講師も含めて５１人の参加で無事に私は基本クラスを終了しました。

１日目、入山時には全員でビーコンチェックして、７つの班に分かれて実習しました。

リフトを降りてから、気候、積雪、地形を確認し、ショベルコンプレッションテストとハンドテストで弱層を調べました。

1mの四角柱が切れるようになりました。

次にスノーシューやスキー、つぼ足でどの位の刺激を与えているか積雪断面観察を行う。また雪庇の両端に２本の溝を掘ってスキーでジャンプした時に出来た弱層破断を青いスプレーで吹き付ける実験では、かなり深い層で出来ているのに驚きました。

顔の部分は雪が入らないように一人ひとりが埋没体験。深く埋められるわけではありませんが心理的に怖いです。外で話し声が聞こえるのに、中から「オーイ」と叫んでも声が届きません。ビーコンがなければ見つけてもらえません。亡くなった人たちの無念さを実感することが出来ました。

雪庇に２本の溝を掘り雪庇の全体構造を知る

ビーコンによる捜索では、電波誘導法で、埋没者の範囲を出来るだけ絞りその後はクロス法でピンポイント捜査をします。私は１回目はビーコンをあちこちに振りすぎて場所を特定できず、５分以上かかり失敗。２回目は、近くなったら雪面にビーコンをつけて捜索して２分台で見つけることが出来ました。

２日目、外は吹雪です。参加者からは「中止でもいいよね」の声も聞かれ私も同感でした。リフトは動かないと決まると、沢沿いに下降変更して、しっかりカリキュラムにそった研修が行われたのです。

基本クラスは各チームごとに、セルフレスキューの方法を学びました。私はビーコン捜索担当。２分以内で埋没者を発見出来たのですが、プローブ、スコップでの救出に気持ちを切り替えることが出来ませんでした。実際に雪崩に遭遇したらどう仲間と連携して救助できるのか何回も研修してみないと出来ないと思います。

中級クラスは、本格的に大きな穴を掘り、Ｓさんを埋没。もう一人は半身が埋まった状況。もう一人（ザックにビーコンを送信にしたもの）と三人の遭難者を捜索するセルフレスキューの方法を中級クラスの５人が本番さながらに行いました。

吹雪で寒さに震えながらの研修会でしたが大きな学びになりました。

弱層が出来る理論が教科書だけでは分からず、今ひとつ理解出来なかったのが残念でした。

雪崩事故に遭わないために

仲間の死を教訓に

五感を研ぎ澄ますことの大切さ

樋口みな子

昨年11月、上富良野町の上ホロカメットク山で、私の所属する山岳会の仲間4人が雪崩に巻き込まれ、尊い命を亡くしました。新年早々には、岐阜県の槍平小屋付近でテントを張っていたパーティー4人が雪崩で亡くなりました。

雪崩事故に遭った上ホロカメットク山での冬山訓練には参加していませんでしたが、心のどこかで、何の知識もなく冬山には入れないという意識が働いたのかも知れません。

雪中からビーコンを探し出す講習会参加者＝12月2日、藻岩山

雪崩講習会

昨年12月2日は藻岩山、今年1月20日は中山峠の雪崩講習会に参加しました。雪崩から身を守るためには雪山全体に目を向けて、雪崩の兆候をしっかり見極めることが大切です。地形、積雪、気象から出来るだけ多くの情報を集めて判断するのですが、積雪の内部の様子を知ることも大事なことを学びました。

中山峠スキー場近くの蓬莱山周辺で、これから登ろうとする斜面を選び、雪の中に弱層があるかどうかを調べる訓練をしました。山スキーをはずして出来るだけ安全な場所を選び、縦横30㌢、深さ1㍍の四角柱を鉛直に掘り出します。その雪柱に手やシャベルで少しずつ力を加えていきます。弱層があると、雪柱前面に亀裂が走り、雪崩が起きやすい積雪状態であることが分かります。

この日の雪はほぼ安全と確認しました。私はスノーソー（雪ノコ）は初めての使用で、きれいな雪柱を作ることができず、何度もの訓練が必要です。冬山に行くには弱層テストができる技術を習得しなくてはなりません。弱層がある時は、どの程度の力が加わった時に雪が崩れるのかを知り、場合によっては登山を中止することも必要です。

装備と捜索技術

次に行ったのは、雪中に埋められたビーコン（電波発信機）を探す訓練です。雪崩に遭った時、迅速に救出の可能性を高める装備がビーコンです。デジタルビーコンが方向と距離を示してくれるので、5分もかからずに掘り出すことができました。

しかしゾンデ捜索はたくさんの経験が必要です。ゾンデは、雪崩が起きた現場の雪に刺して人を探し当てる金属製の長い棒です。講師が「公園のベンチや木の感触など実際に当ててみて確認したらいいですよ」と話していたのが印象に残りました。

小野有五さんが「自然のメッセージを聴く」の中で五感を研ぎすましてと語りかけていましたが、雪崩講習会を受けて、ビーコンはひとつの道具であって全てではないということ、雪崩の知識と回避技術だけでなく、「雪崩の匂い」を感じ取る雪山の経験と、仲間を助ける技術が必要であることを学びました。私は自分自身も含めて雪崩には遭いたくないし、これ以上の仲間を失う悲しさは二度と体験したくありません。

＊

友人から「冬山には気をつけてください」とのお手紙をいただきました。雪崩情報はHPでも公開されています。安全第一に冬山を楽しんでいただきたいと思います。

本 Books

生きてみようよ！

松浦　幸子著　東京史料出版会
１７００円＋税

心の病気を抱える人たちが料理を通じて交流する調布市のクッキングハウス。２０周年を記念して、ここに集う４７人が実名で発病の経緯やクッキングハウスに出会うまでの不安や苦しみと安心できる居場所で回復した過程を率直に綴っています。

当事者のひとりである池田明弘さんは病気だからといって決して不幸ではないと書いています。どの当事者の文章からも、病気と仲良くつきあいながら地域でく暮らせる喜びが伝わってきます。

北海道では浦河のベテルの家が、クッキングハウスのような役割を発揮しています。それぞれの人のペースで仕事をし、収入も得ている場ですが心の病気をありのままに受け止めてくれる場は圧倒的に少ないと思います。

クッキングハウスを主宰する松浦さんは、３２歳の時東京ＹＭＣＡの専門学校で精神科ソーシャルワーカーになるために学んでいたとき、精神科病院で長い年月を暮らしてきた当事者たちの姿に、こんな差別があっていいのかと怒り、心の居場所を開いたと語っています。松浦さんは２０年かけて差別も暴力もない一人ひとりの可能性を伸ばせる居場所が、平和を実現する貴重で大切な場だったのだとあらためて気づいたと綴っています。あの穏やかな笑顔のどこから強い意志が生まれるのでしょうか。メンバーからの信頼は絶大なのです。

２００４年、夫の正行さんを突然亡くします。定年になって始めたパラグライダーの練習中、山に落ちて遭難。救助されましたが助かりませんでした。そのときメンバーの温かい言葉に癒されたと綴り、スタッフと心に病気を持つメンバーとの温かいつながりを感じさせてくれました。

地域で心の病気を抱える人たちが安心して暮らせるクッキングハウスのような居場所が日本中に広がって欲しいなと思います。

風と光の散歩道　ー宮澤賢治の植物を訪ねてー

細川律子著　　椋鳥書房　　１８００円＋税

岩手県の一戸に生まれ育ち、今は石川県で暮らす細川さんはいつも野の草花が傍らにあり眺めて暮らしてきたという。

賢治の評伝は数多くありますが、賢治の作品にたくさんの植物が登場するのに気が付かずにきました。

りんどうやうめばちそうなど４０の植物と賢治の世界がパーと目の前に広がりました。細川さんの日常の暮らしと賢治の物語がつながり４０作品の魅力を存分に伝えています。

私がりんどうの花が好きだったのは、きっと子どもの頃に読んだ「銀河鉄道の夜」の中にあった「たくさんのきいろな底をもったりんどうの花のコップが湧くように、雨のように眼の前を通っていく」光景だったのだろうか。昨年９月に登った旭岳姿見の池周辺にも青い空に負けぬ位青紫色のエゾリンドウがたくさん咲いていました。みんなの幸せを捜しに行こうとカムパネラを誘ったジョバンニ少年の乗った銀河鉄道が本当にあったらいいなと子どもの頃は思ったけれど、今読むとジョバンニの孤独に胸をつかれます。

「なめとこ山の熊」にはひきざくらが登場します。辛夷の花を花巻の地方名で「ひきざくら」というのを初めてこの本で知りました。

野山に春一番に咲くコブシは空に向かって力強く、待ち望んでいた春の息吹を感じさせてくれる好きな花です。雪国にとっては農作業を始めていいという合図でもあったそうで、その日を境にきびきびと働く父の姿と重ねて細川さんにとっては「何らかの力を与えてくれる不思議な花」となったとあります。

この物語は一年の大半が霧や雲に包まれている、なめとこ山に住む熊捕りの名人の小十郎と親子の熊とのお話。

ある年の春、月光をあびながら、ひきざくらを見ている熊の親子の会話と光景が美しく胸を打ちます。その光景を見て、そっと引き返す小十郎の優しさもいいです。

賢治の生き方を暮らしの中に取り入れている細川さん自身の姿が伝わってきます。

細川さんの描いた温かい植物の挿絵もすてきで、それらが生き生きと踊り出して、野の花がとても愛おしくなりました。賢治の作品がとても新鮮で人間としてのありかたをあらためて教えられます。またゆっくりと賢治の作品を読んでみたいなと思いました。

新聞記者　疋田桂一郎とその仕事

柴田鉄治/外岡秀敏　編　　朝日新聞社　　１２００円＋税

本書は疋田さんの薫陶を受けた二人の後輩がその仕事をまとめ世に問うたものです。

編者のひとりである柴田さんは結びにかえてで本書を出版した意図を「疋田さんの仕事を通じて新聞とは何か、新聞記者とはそもそもどういうものなのかを多くの人たちに知ってもらいたいと考えたからだ」と書いています。

父が朝日新聞の読者でしたので子どもの頃から親しみのある新聞でした。７０年代の記事には印象に残る記事やルポがたくさんありました。今はじっくり企画した記事が圧倒的に少ないと思います。

疋田さんは心に残る天声人語をたくさん書きました。鋭い観察力と、深い取材に裏打ちされた文章は簡潔で平和や憲法擁護、権力批判に貫かれています。

疋田さんの代表的な記事の中に「何を語るか？東大生らの遭難」と題した１９５９年の文章は今読んでも新鮮です。後輩記者であった本多勝一さんは「文体が素晴らしいことはもちろんとしてそれ以上に着眼のしかたや切りこみの角度、いわば基本的なものの見方が実に鋭い.。疋田記者は山の遭難報道で革命的な転換をやってみせた。」と記しています。山の遭難を美化してはならない。「英雄扱いはお門違い」と問いかけました。取材に裏打ちされた既成概念にとらわれない着眼点に圧倒されました。

「ある事件記者の間違い」と題するレポートが見事です。７５年に東京のある大手銀行のエリート行員が重い障害のある我が子を「餓死させた」という罪で有罪判決を受け、その後自ら命を絶った事件の検証です。疋田さんは同事件の取材、記事について公判記録や入手した膨大な記録をもとに考察。その結果、警察調書のウソとその発表をもとに記事を作った事実が明らかになります。疋田さんは「このような事件報道が人を何人殺してきたのか」と警察発表をそのまま伝えることの危険性に警鐘を鳴らしています。

新人記者の研修講義では、日本語として文法的に正しい文章。真水のような文章。読む人に抵抗なしに読めて事柄それ自体が伝えられている文章を書こうと心がけてきたと語っています。私も文章を書く基本を教えられました。

私が天声人語で好きな文章は、「地下道の散歩」です。「この道はたっぷり二十分、考えながら歩くことができる」「どんなに車が横暴か。どんなに町が荒れすさんでいるか。時々静かな地下道を歩いてみると、それが実によくわかる」とあります。風の音や犬の遠吠え、野鳥の声など遠い音に敏感な人でした。遠い音が都会から消えてしまったことへの異議を申し立てていることにも気づかされます。

権威に反する姿勢を貫いた疋田さんのような記者がもっと増えて欲しいと思います。

人類の足跡１０万年全史　スティーヴン・オッペンハイマー著　仲村明子訳

草思社　２４００円＋税

著者はＤＮＡ研究を考古学や気候学などの知見と結びつけ、古代の移動を跡づける研究で世界的に知られています。

現生人類はアフリカで生まれ、一度絶滅しかかったがやがてアフリカを旅立ちます。だがその旅立ちはたった一度しか成功しなかったといいます。そしてアジア、オーストラリアへ。ヨーロッパ、アメリカへと人類は驚くべき速度で世界各地に広がっていったといいます。

著者は遺伝子に刻まれた人類の壮大な歴史を読み解き、化石記録と気候学からその足跡を追っています。

これらの研究が世界の異なる地域に住む人々が任意に提供してくれた現代のＤＮＡを使って行われているというのも驚きでした。気の遠くなるような１０万年前にアフリカに祖先があると思いを馳せるだけで壮大なロマンを感じます。

日本では亜熱帯の島、沖縄で発見された港川人の頭蓋化石から最終最大氷期の頃と推定され、やや頑強な特徴が見られるといいます。頭蓋の形によって、前新石器時代にあたる日本古代の縄文人と分類され、北部日本の先住集団、アイヌの祖先と考えられるといいます。

私の力では全体像を伝えるのが難しく残念ですが、長い旅の中で、気候にあった特徴をもったさまざまな人種になっていったと知って、この研究が人種差別をなくす運動にも役だって欲しいと思いました。

処女峰　アンナプルナ モーリス・エルゾーグ著　近藤等訳　山と渓谷社　１８００円＋税

１９５０年６月、３１歳の若い隊長、モーリス・エルゾーグの率いるフランス登山隊は、モンスーンが襲来する前の短い期間中に、偵察も全てを処理し、見事に登頂に成功。エルゾーグ隊長とラシュナルのふたりははじめて８０００m峰のアンナプルナの頂上に立ちました。しかしその代償として、エルゾーグは手足の指を、ラシュナルは足の指を凍傷のために犠牲にしなければなりませんでした。

本書はエルゾーグがフランスに帰国後、パリで凍傷治療のための八回の手術の合間に当時の状況を回想して口述したアンナプルナ登頂の物語です。

山に登る人なら誰もが読んだ本かも知れません。私は雪崩事故で仲間を失って、悲しみの中でこの本に出会いました。未知の８０００m峰をめざすエルゾーグ達の素朴な喜びが伝わってきて、ぐんぐん引き込まれました。地図と地形を見ながらルートを偵察し、アンナプルナアタックが決まり登頂に成功するまでの喜びは、私も同行しているような興奮を覚えました。しかし安全地帯までの下降には想像を絶する試練が待ち受けていました。雪崩に流されエルゾーグの手袋は飛ばされ凍傷に苦しみながらやっと仲間のいるキャンプにたどり着くのです。初登頂を支えた隊員たちの友情が素晴らしい。さらに全員で下山するまでには雪崩の危険のある急斜面を通過したりと困難をみんなで乗り越えて行くさまが、手にとるように伝わってきました。

この本は未踏の山に登る喜びや、困難を克服する勇気や精神力、仲間の友情など、私たちに生きる力を与えてくれます。

「人間の生活には、他のアンナプルナがある」のエルゾーグのことばに勇気づけられました。

映画

その名にちなんで　アメリカ

監督　ミーラー・ナーイル

ピュリツアー賞作家ジュンパ・ラヒリの小説を基に描いた作品です。

１９７４年、列車事故で生き残ったインドの学生アショケ（イルファン・カーン）は３年後、見合い結婚したアシマ（タブー）とニューヨークに住みます。生まれた息子にゴーゴリと名付けます。成長した息子は名前のことで友人にからかわれ、自分のアイデンテイティを見つけ出そうとその名をめぐって苦悩します。

ゴーゴリ（カル・ペン）は成人し建築家として自立。アメリカ名を名乗り、アメリカ人の恋人もいます。愛情豊かに育てたのに、両親と疎遠になりがちな息子に、アショケはその名の由来を語るのです。

アショケが列車事故のとき、作家ゴーゴリの本を持っていたことで目印になって奇跡的に助かったことを話し出します。名前に込められた父の思い。子の自立にとまどう母。ふたつの文化に翻弄される息子。それぞれの思いが交錯します。名前の由来を知って、自分の存在する意味を発見していく息子の変化がいい。

原作者のジュンパ・ラヒリさんは、インド出身の両親にアメリカで育てられ二つの文化を生きざるを得なかった。発音しにくい自らの名はその刻印に思えたと語っています。

私も小さい頃、当時としてはひらがなの名前が珍しく「どうして漢字の名前にしてくれなかったの？」と両親に聞いたことがありました。本好きの父から「小説の主人公がみな子といって心優しい少女でね」と聞かされたとき、自分の名前が大好きになりました。妹はまっすぐな子にと直子と名付けられました。響きが似ているのか、ひとつ違いであったためか、しょっちゅう名前を間違われたことを懐かしく思い出しました。

息子は遼（はるか）。たくさんの思いを込めた名前を大事にして欲しいなと思います。

映画評　山田洋次監督　**母べえ**

戦争が引き裂く家族の絆

戦時下の1940年、治安維持法違反容疑で夫を特高警察に逮捕された「母べえ」の佳代（吉永小百合）が、2人の娘とともに、周囲の人たちに助けられながら、ひたむきに、強く明るく生き抜く姿を、温もりのある茶の間を通して描いた作品です。娘である野上照代さんの「父へのレクイエム」が原作です。野上さんは黒沢明監督のスクリプター（記録係）として活躍した女性です。

ドイツ文学者の父べえ、野上滋（坂東三津五郎）が反戦を唱えたとして未明に特高警察の捜索を受け、家族の前で逮捕されます。

私たちが映画から知るのは自由にものを書いたり、話したりできない戦争の時代の怖さです。思想、言論の自由を弾圧する治安維持法が猛威を振るっていたのです。野上滋は転向上申書を書かされますが、教え子の検事に、この戦争を聖戦と書けと迫られます。逮捕後、自宅に帰ることなく獄死した父べえの無念、母べえの悔しさと悲しさに、胸が締め付けられます。

映画は隣組や宮城遥拝、贅沢品撲滅運動など、母べえたちを縛った息苦しい統制の数々を映し出し、子どもたちが学校で四大節に歌わせられた歌も当時を活写します。御真影（天皇裕仁と皇后の写真）への最敬礼など、それら全てが戦争を遂行するための手段であったことを知り、こんな時代は二度と許せないと怒りがこみ上げてくるのでした。

獄死した父べえが自宅に帰ってきた日に降りしきっていた雪。ラストに、妻を思う滋の手紙が流れて、こんなにも深く信頼しあえた夫婦があったことに感動を覚えました。

母べえと姉妹を献身的に支えた心優しい人たち――父べえの教え子の山ちゃん（浅野忠信）は戦場に送られる途上で海底に沈み、贅沢品撲滅運動を笑いとばす叔父さん（笑福亭鶴瓶）は吉野の山の中で野垂れ死にし、父の妹（檀れい）は広島で原爆死します。

「茶の間を大きな時代が通り過ぎていった映画」と評した人がいました。母べえと娘たちの息づかいや、まなざしで当時の情景が伝わってきます。若い世代の人たちにこそ観てもらいたい映画です。（樋口みな子）

この映画を東京有楽町で見ました。２月３日東京は吹雪でしたが、家族連れの観客が多く見にきていました。
私自身は吉永小百合以外の女優のほうが良かったのではないかと思いました。余りにも立派な母べえでしたから。

購読料をありがとう

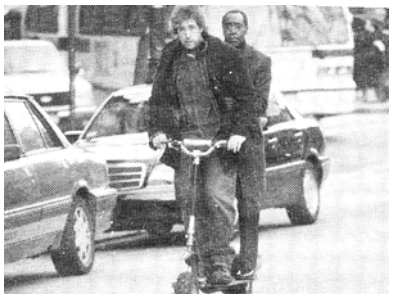
２００７．12月21日～２００８．２月18日

佐々木純一（札幌市）　阿保亘（帯広市）　笠井嗣夫（札幌市）　坂井恒俊・京子（旭川市）　伊藤康弘（札幌市　）中野俊久（札幌市）　安田治（札幌市）福原正和（札幌市）　木村玲子（札幌市）　反橋一夫（札幌市）カンパも含めての方　栗城幸二（北見市）３，０００円　竹内正明（札幌市）５，０００円　上幸雄（小平市）３，０００円　佐藤守（札幌市）５，０００円　久野真紀子（様似町）５，０００円　合計３２，０００円は印刷、送料に使わせていただきます。（敬称略）ありがとうございます。
そのほかに福原正和さんから書籍「人類の足跡１０万年史」や映画のチケットなどいただきました。ありがとうございます。

「ヘレンケラーを知っていますか」

童謡詩人金子みすゞを生んだ山口県で目が見えず、耳が聞こえないというハンデを背負いながら強く生きる実在の女性をモデルにした映画の紹介です。
チラシを道内の方には同封しました。チケットは私のところにあります。是非ご覧下さい。
３月１３日（木）　１８：１５開場/１８：４５開演
札幌市教育文化会館大ホール
問い合わせ011-382-9020へ

２００８年1月１２日北村の「北の生活館」で雪崩講習会の座学で運動生理学を教えている北大の須田力先生の説明を聞く（撮影小山健二さん）



再会の街で　アメリカ　監督　マイク・バインダー

家庭も仕事も順調な歯科医アランと９．１１で家庭を失い、仕事もせず殻にこもった生活をするチャリー。大学時代の親友だった二人がニューヨークの街角で偶然再会します。普通ではないチャリーを心配して友情を取り戻そうとするアラン。
そこにアランの妻や、精神科医の女性や、夫への不信から心が壊れかかっている女性などがからみ、チャリーが家族の死と向き合えるようになるまでのそれぞれの再生の物語です。
親友にも心を閉ざし、半身を失ったように街を徘徊するチャリーが痛ましい。
９．１１で突然家族の幸せを奪った事実に、私がその立場だったらとチャリーの痛みが理解できました。
昨年、雪崩で突然愛する人を失ったご家族の気持ちに思いを寄せて見ました。話すことで癒されていくチャリーが外に向かって歩き出す姿に思わず涙があふれました。

雪と遊ぶ

１月１３日イグルー作りを楽しむ
北村で（撮影小山健二さん）

２月１９日　利根別自然休養林で

２月１５日　近代美術館前で雪の
ピラミッドを制作中

１月に雪の中にカメラを落として見つからず、その時の記録もなくしてしまいました。北村での雪崩講習会の写真は小山健二さんからＣＤを送っていただきました。ありがとうございます。

１月１４日三段山で（撮影　荒木岳さん）

会議やさまざまな用事が重なり、２月は１本の映画も見ることが出来ませんでした。本もなかなか集中して読めなかったです。本の紹介でも書きましたが「処女峰アンナプルナ」に勇気づけられました。私の愛読書に加えたいと思います。
発行が遅れて申し訳ありません。（みな子）